

「対話と実行」座談会
(平成23年度第1回 仁淀川地域)

日時：平成23年4月22日 18:30～

会場：日高村社会福祉センター

1. 開会

ただ今から仁淀川地域の皆様と知事との「対話と実行」座談会を開催させていただきます。

この座談会は、尾崎知事が各地域にお伺いし県民の皆様方との対談を通じて、地域の実情や課題を把握し、皆様の声を県政に反映をしようということ、平成20年度から実施しております。

本年は「地域の活性化」をテーマとして、県内7つのブロックに分けて、開催させていただくこととしており、本日はその第1回目として、この仁淀川地域で産業や福祉などの分野で活躍をされている8名の皆様方に参加をいただきました。

～このあと、市町村関係者、県議会関係者、県関係者の紹介と、要約筆記(聞こえの不自由な方にその場で音声文字にして伝える活動)の実施についても紹介が行われました～

2. 知事の県政方針の話

(1) 「対話と実行」座談会

本日はお忙しい中ご出席を賜りまして、どうもありがとうございます。今日は、仁淀川地域の皆様方と平成23年度の「対話と実行」座談会第1回目を開催させていただきますが、これまでに全部で57回開催させていただきました。最初の年は住民の皆様いろいろな各分野のことについて教えていただき、21年度、22年度はより専門的にテーマを絞った形のものや高校生の皆さんと対話をさせていただく形で開催してまいりました。この23年度に入りまして、もう一度それぞれの地域にお伺いして広範な課題について、皆様いろいろなご意見を賜りたいと20年度と同じ形式に戻して対話をさせていただこうと考えているところです。

産業振興計画、日本一の健康長寿県構想、さらには教育改革の取り組みなど、様々な取り組みを20年度以降実行してきました。これを踏まえてさらにもう一段、例えばどういう形で政策を組み上げていくことが重要であるのか、今年度の「対話と実行」座談会を通じて皆様方いろいろなご教示を賜りたいという思いです。

今までもこの「対話と実行」座談会を通じていろいろな政策を作り、実行してきたものがあります。例えば、福祉の分野でしたら「あったかふれあいセンター」という取り組みが「対話と実行」座談会の中でいろいろお知恵をいただいて実際に実行しようとし始めたものです。さらに地域アクションプランの前段階にあるステップアッププランという取り組みを実践し始めたりしたのも、この「対話と実行」座談会を通じてのことです。いろいろな意味で今までもお知恵を賜り、それを政策に生かすべく努力をしてきましたが、実行

段階に入っている政策についてもご指摘やご指導など、お知恵を賜りたいというところが多々あります。

(2) 5つの基本政策 ～経済の活性化、インフラの充実～

それでは簡単に今の県政の概要、方向観についてお話をさせていただきます。

今日、お手元にお配りした「高知県の財政」をご覧ください。5つの基本政策に基づく県づくりを今進めようとしています。その第1が経済の活性化、産業振興と雇用の創出です。今、全速力で進めているのが、産業振興計画ということになります。産業振興計画の中核となる考え方として、地産外商を進めようと、いろいろ取り組みを進めてきました。一昨年8月には地産外商公社を設立して、その地産外商公社が首都圏の拠点として、アンテナショップ「まるごと高知」を昨年8月にオープンして県外への売り込みを図ってきたところです。

例えば、展示商談会を1年間で20件ぐらい開催し、成約件数が340件を上回るなど、地産外商公社とか大阪事務所、名古屋事務所を通じて、県の取り組みの中で契約が結べるようになりました。その前年の倍ぐらいのスピードで契約が取れるようになってきたりしています。

ただ、NHK大河ドラマによる龍馬ブームのおかげでというのも否めない事実ですので、その龍馬ブーム無きあと、いかにしてこの外商をしっかりと進めていけるか、これが非常に大きな柱となるわけです。今後についても外商をどうやって維持していくか、いやもっと前に進めていくかということに大いに力を入れていきたいと思っています。

加えまして、ものづくりの地産地消の抜本強化として、高知県でできるだけものづくりをして、それを外に売って生じた経済効果が、高知県内にできるだけ及ぶようにすることをもう1段、2段、意識をしていきたいと考えています。ものづくりは地産地消で、できるだけ県内の中でやっていって、メイドイン高知のものを県外に売っていくことで大いに経済効果をもたらしていく、そういう方向を是非、目指していきたいと考えているところです。今度6月に「ものづくりの地産地消センター」という機関を設置することとしていますが、県内事業者さん同士のご紹介、マッチングを強化する機能を持ったり、さらには企業の設備投資を支援するような制度を設けたり、「地域産業の育成と事業化支援の強化」ということで地域アクションプランの取り組みをもっと伸ばしたり、こうち型集落営農の取り組みをもっと強化したりというような形で、県内でのものづくりを強化するということを是非進めていきたいと考えているところです。

2つ目の観光については「志国高知 龍馬ふるさと博」ということで、できるだけ龍馬ブームを引き継いでいきたいと思っています。

そして、3つ目、4つ目として新エネルギーを産業振興に生かすこととか、さらには産学官連携を強化することなど、非常に長期的な視点も入れていきながら、先々10年後、20年後の高知県を担っていけるようなリーディング産業を作っていくためにも、こうい

う将来に向けた投資に、今後より力を入れていきたいと考えています。

中でも高知県の森を生かしていく、木質バイオマスについては、例えば園芸農業の加温に石油を使うと、その燃料代が全て国外へ抜けていくことになるわけです。これをもし高知県の森の間伐材などを燃料源とすることができれば、その燃料代は県内をクルッと一回りすることになります。今園芸ハウスで使っている燃料代が、大体年間で50億円ぐらいだそうですが、これが国外へ抜けていくのか、それとも高知県の山をめぐるようになるのか、これは経済効果としては非常に大きな違いではないかと思います。一足飛びに全てをこの木質バイオマスに置き換えるということにはできないにしても、できる限り、新エネルギーを産業振興に生かすというのは、そういう点（目指している県内での循環）につながっていくのではないかと考えています。

5つの基本政策の2番目、インフラの充実と有効活用。まだまだ遅れた点がたくさんあるインフラ整備を着実に進めていくことが必要だと考えています。

(3) 5つの基本政策 ～教育の充実と子育て支援～

3番目の柱として教育の充実と子育て支援です。全国でいろいろテストなどをやりますと、高知県の学力は、公立中学校は全国で46番でした。体力テストは全国で最下位の47番でした。その後、いろいろな形で教育改革、例えばしっかり中学校で宿題を出すようにするとか、さらには、放課後の学びの場をつくっていくとかそういう取り組みをしていくことなどいろいろ進めてきて、19年度から22年度までにかけて、教育面では全国で1番のスピードで改善をしてきました。ただ、それでも、中学校の学力は、まだ46番です。当然、順位が全てではありませんし、それよりも中身が重要なのです。体力テストの改善率も20年度から22年度にかけて、こちらも全国で1番ぐらいでありましたから、急激には回復してきています。ただ、まだまだの状況です。

この教育改革の取り組みは、むしろこれから腰を据えて進めていくことが是非とも重要であると考えているところです。まだ道半ばですが、近年の中では久しぶりに、本格的に状況が上向き始めている状況なのではないかと思しますので、逆にこれを一過性に終わらせない取り組みが是非とも重要だと考えています。

(4) 5つの基本政策 ～県民の安全・安心の確保～

県民の安全・安心の確保に向けた、地域の防犯・防災の基礎づくりということにつきましては、何といたしても、今回の東日本大震災を受けて、この南海地震への備えを抜本的に強化するということが是非とも重要であると思っています。

今、高知県の南海地震対策は、大きく2本柱で成り立っています。1つは「南海地震対策行動計画」という災害に対していろいろな備えを行ったり、さらにはその後の復旧、復興活動についての基本的な計画を定めているものです。そしてもう1つは、「南海地震応急対策活動計画」、これは災害が起こった直後に人命救助から復旧活動に至るまでの間、県庁

の各組織がどのように動くのか、外部の皆さんと協力してどのように動いていくかということについて計画を定めたものです。いずれも地震、津波について一定の想定を置いて、行動計画と活動計画、この2つの計画を定めているところです。

高知県では、南海地震、東南海地震、東海地震の3連動が起こるといようなことを視野に入れて、いろいろなモデルを使ってかなり厳しめの計画、想定を置いて計画を作っているところですが、今回の東日本大震災を踏まえて、もう一段洗い直し、見直しをしています。

さらにもう1つ、今回の大震災が教えてくれた最大の教訓は、やはり想定外のことが起こりうるということを想定して対応が必要だということだと思います。そういう視点でもって、この両方の計画を抜本強化しないといけないと思っています。

今、県庁の中に南海地震対策について再検証をするためのプロジェクトチームを設置しております。こちらでいろいろと今回の大震災についての科学的な検証と、さらには現場における応急、復旧、復興活動中における行政上の対応のあり方なども含めて、よくよく勉強して再検証していきたいと考えています。

ただもう1つありまして、明日例えば地震が起こるとしたら、1週間後に起こるとしたら、1カ月後に起こるとしたら、それに対する対応というのもしっかり取れてなければならない。本格的な対策をとるためには一定時間かかるということが多々ありますが、ただ時間がかかるから、それまでの間は全然安全度が向上しないということであってもいけない。優先順位の高いものは、随時実行していくということが是非とも必要だと考えております。

その過程で必要な設備も改めて明らかになるとか、例えば避難路をもう一段整備しなくてはいけない、もしくは、ここは本当に逃げる場所がないから、津波避難タワーの大きなものを作らないといけないと、そういうことが明らかになってくるのではないかと考えています。優先順位の高いものは洗い出して対応する、そういうことをこれから行っていきたいと考えています。

(5) 5つの基本政策 ～日本一の健康長寿県づくり～

最後に、日本一の健康長寿県づくりですが、保健・医療・福祉の分野で、特にまず医療の分野についていえば、医療再生機構を抜本強化することで、即戦力となる医師の確保の対応策というのを推進していきたいと考えています。ドクターヘリを3月12日から導入しており、ほぼ毎日出動している状況です。救急医療体制の強化としては、このドクターヘリなども活用していきながらの体制強化を図っていきたいと思っています。

「高知型福祉」の実現として、遠隔地の介護、訪問介護等が非常に厳しいという状況があったりする中で、どうやって成り立たせていけるような体制をつくっていくのか、さらには、そもそも地域の支え合いの力が高齢化、人口減少の進行によって弱まっている中で、どのようにしてその地域の支え合いの力を意図的に、政策的に作り出していくのかという

ことが重要となりますので、例えば、今2年目になる「あったかふれあいセンター」というものが今県内40ヶ所にありますが、そういうものについて、より一層機能強化をする対応などを図っていきたいと考えています。

長寿県構想も、2年目になって今回抜本的に対応強化をしようとしているところです。こちらについてもまた、PDCAサイクルをしっかりとまわしていきながら、さらなるバージョンアップに努めていきたいと考えているところです。

～司会から参加者の皆様の紹介が行われました～

3. 参加者との意見交換

【加工場の設置、子どもの遊び場について】

A： 佐川町のほうで苺を栽培しています。一昨年に、農村女性リーダーになりまして、去年地域の3軒4人で加工グループを立ち上げました。全部地元で採れたものばかりを材料にしたプリンなどを作っています。地元のおばあさんの地鶏の有精卵や、グループの中の酪農家が出荷している佐川町の製乳会社の牛乳を使っています。

ショウガやハッサク、苺はうちの苺ですけど、地元のものを使った加工品づくりをもっとこれから種類を増やしてやっていきたいと思っています。ただ、これは黒岩じゃなくて、実は作っているのは佐川町の街中のほうの農協の加工場を借りて作っていて、地域のすぐ近くに加工場がないというのがちょっと残念なところで、近くにあったら、もっとこういう加工を始めてみたいという人が気軽にできて増えてくると思います。加工場があまり遠いと最初の一步が踏み出しにくいので、近くにあったらいいというのが皆の意見です。

地元の物を使うことで、この地域の中の農家の材料を仕入れて、加工品を作っていく取り組みを進めて自分たちだけではなく、地域が盛り上がっていく、働く場所になっていけたらなという思いもあります。若いお母さんとかあまり働く場所もないので、近くで3時間、4時間のパートができるような場所になったらいいなと、夢として思っています。

それから、私には3人の子どもがいますが、田舎で遊ぶところがいっぱいあるみたいですが、子どもが集まったらゲームしていることが多いです。以前、冒険遊び場ということで、新聞に出ていたんですが、子どもが自分で考えて遊べる場所があればいいと思います。自由に遊べる場所、公園のような遊具が欲しいわけではなく、そういう場所があったらいいなと思います。

知事： 「地乳」として売り出している製乳会社さんとお話をさせてもらったことがあるんですが、今、いろいろな加工品が今できていますね。

さっきお話したように、ものづくりの地産地消で、地元の物を使って物を作っていて、それを外へ売っていくことで、外貨を稼いでくれると、経済効果は大きいわけです。おっしゃるように、できるだけ地元でいろいろ加工場ができて、それが例えば近所の人のパー

トの場所になっていったりするというのが、本当に理想だと思います。

仁淀川地域本部として、地域の産業振興計画を進めている地域産業振興監も、皆様方がどんどん頑張っておられるので、次に進める、例えば加工場などについて、是非一緒に相談させていただきたいという話をしていましたので、よろしくお願いします。

ただ、一般論として、今回は全体として産業振興計画を作っていくとき、まずハードよりソフトを先行するという順番でやり始めたんです。昔もいろいろな加工品をたくさん作ろうじゃないかということで、県全体でやろうとした時期がありました。これが60年代の頃なんですけど、そのときは先に加工場をたくさん作って、それでもものづくりを始めてという時期があったそうです。けれど、やっぱり売れないと長く続きません。ですから、今どちらからと言うと、地域で加工品を作っていて、それで実際にお店に出していただいて売れてきて、これは続けられるねという話になって初めて投資をしていく、本格的に投資をしていくという形で少しずつステップアップしていく、そういうやり方をとってきているところです。

ご不便をおかけしていますけど、これが売れなかったら、先に加工場があっても、結局加工場が無駄になるので。全般として、まず少しずつ作ってみて、それをソフトのアドバイザーの方々にも入ってもらって売れる物だと確認していく。例えば、東京のアンテナショップの「まるごと高知」などを使っていただいて、もっと販路を開拓していただく、これはもうビジネスとして成り立っていくなと分かると、今度投資計画を立てて、具体的な加工場にしていくという順番かと思っています。

ただもう1つ、多分おっしゃりたいのは、敷居の低さがこの産業振興計画なんかでも重要じゃないかということだと思うんです。地域アクションプランになる前段階での取り組みについて、実は2年目の「対話と実行」座談会に行ったときにたくさんご意見が出まして、まだ本格的に地域アクションプランになる前の段階の研究などをバックアップするような、ステップアップしていくのを応援するような、仕組みなんかも作ったりしました。いずれにしても、地域でものづくりを根付かせるようにすることと、それからあともう一つ、できるだけ敷居を低くしていくこと、そういう方向でやっていくことが重要だろうなと思います。

2番目のご意見の子どもの遊び場というのは、具体的に何かあったら教えてください。

A： プレイパーク、冒険遊び場っていうんですけど、土佐市にあって、個人の方が山に作って、プレイリーダーという人がいて、子どもに竹を切って滑り台や木でシーソーを作ったりする遊び場のようです。

知事： 自分で遊びを作るところがいいんじゃないかと、いうことですね。わかりました。勉強させてもらいます。ありがとうございます。

【中山間地域での薬草栽培】

B： 漢方薬メーカーに薬草を出荷していますが、このメーカーとの出会いがちょうど23年ぐらい前になりますが、私は人の出会いは宝を運ぶものであるという認識をしております。このメーカーは、高知県にも非常に深い関係がございます。いい人に囲まれて今日までまいりました。

現在、薬草の栽培地としては、仁淀川地域は県境を越えております。それから県内の南のほうでは宿毛とか大月など県内いたる所へどんどんお願いをしたりして、サンショウの栽培面積にして67haぐらいあるんですが、まもなく100haの面積が達成できそうです。

ですから、今いくらでもこれから作っていくという覚悟で工場の充実とかを進めていて、それが1600㎡ぐらいあり、中には茶工場であった所なども活用しております。漢方薬メーカーのほうから資金を出していただいて、全部機械は貸与でやっています。不思議なくらいついて、恐らくもう6年ぐらいしたら売り上げも8億ぐらいになるんじゃないかという計算もしております。研究品目についても12品目ぐらい一緒に研究しております。今流域の中で、越知町が一番薬草の栽培が多いですけど、いの町などいろんなところから要望があって一緒にやっつけていこうや、みんなで生きていこうやという考え方です。もう私も1人で指導しきれなくなって、若い連中にちょっと行って来いと言ってもらっております。

それからもう1点は、土佐の漢方の中からいくつか研究して今後商品化をするよう進めております。会社のある越知町今成地区は水没区域ですが、災害時の移動も考えて研修所と一緒に避難所も作っつけていこうと着工しております。今回の大震災があって、そのメーカーとのいろんな連携のために、工場の分散もこれから考えていかないといけないというところなんです。

我々は前だけを考えてやっつけていったらいいと思っておりますが、一番困っているのは繁忙期の人手が800人くらい不足しているので、どこから構えてくるかということです。

時間があつたらまた来ていただければ、百聞は一見にしかずということがございますので、どうぞよろしく願いいたします。

知事： 県域を越えて和歌山あたりからも加工してくれと依頼があるそうで、すごいですね。

漢方薬メーカーには私2年前にご挨拶に行ったことがあって、そのときに「高知県の農家の皆さんが大変お世話になってます」と私が言ったら、向こうから、「全く逆ですよ」「私たちが本当にお世話になっているんで、越知町の皆さんのお力がなかったら漢方薬っていうのはできないんだ」というお話をされました。

2点ぐらいお伺いしたいのですが、この漢方薬を作っていくということは、比較的軽いものが作れるということもあつたりして、中山間地域の今後の現金収入を得ていくための一

つの大きな武器になるんじゃないかと思うんですよね。こういう取り組みというのは、ど
んどん県内に広げていきたい、さらにもっと言えば、いろんな品目を栽培できればもっと
県内のいろいろな中山間地域へ広げていけるんじゃないかと思うんですよ。多分、企業秘
密で全て教えていただけないところもあるんだろうと思いますが、今後の中山間地域の現
金を獲得していくためのエースとして漢方薬栽培というのをどう広げていくのがいいだろ
うかと、そこらあたりのアドバイスをいただけないでしょうか。中山間対策の柱の一つに
したいと思っています。

実は牧野植物園もいろいろ新しい薬草の栽培、開発をされていて努力をされているんですけ
ど、いろいろお力を賜って、ミシマサイコだけじゃなくて、新しく開発している漢方薬と
か漢方の薬草とかを、是非、いろいろな地域で使えるようにできればいいと思います。本
当よろしく願いいたします。

それから2点目、さっきお話をいただいたことですが、繁忙期の農業従事者が800
人くらい不足するということですが、実際にはどうしておられるんですか。

B: サンショウを採るのに60日ぐらいかかるんですが、機械の稼働率を高めていくと
いうことにはやっぱり海拔差で勝負していかないといけないと考え、そういうことも一つ
の狙いで栽培地域を源流へ源流へ上っていったんです。

知事: ああ、それで時期をずらしていくんですか。

B: はい、そうです。そうしたら機械の稼働率がものすごくいいでしょう。

知事: できるだけ収穫を集中させないようにしている。薬草は加工するからそういうのが
可能なんですか。

B: 植物の開花の時期が随分違ってきますので。

知事: なるほど。人手不足で人口が少ない大変なところの対応として、そうやって植える
場所をいろいろ工夫することでピークを抑えて、安定的にたくさん作ることができる、そ
ういうようなことなんですね。

B: もう1つは、栽培を広げた流域各地の雨量を知るということは、やっぱり下流に住
む我々はその影響を非常に受けるので、どれぐらい降ってますかという情報が、すぐ入っ
てきて防災的なネットワークもできています。

知事: 本当に軽くて比較的栽培のしやすい植物というのを複数持つておくことで、中山

間地域の集落で現金収入が得られるようにしていくという方向を目指したいと思ってまして、こうち型集落営農という取り組みを進めていこうとしています。例えば、ご存知の越知町の横畠地区の皆さんも、まさにそういう取り組みをして、いろいろな作物を育てて周年的に複数回、収穫をする場を持つようとしておられる。それで、現金収入が得られるので集落は成り立っていく、この方向を目指していきたい。その中で本当にこの薬草というのは、今後高知県にとって非常に重要な作物じゃないかと思ってますが、引き続き是非いろいろとご指導ください。

【まちを元気にするための「まち歩き」の取り組み】

C： わたしはラッピング店を経営しております。そもそも私がラッピングを始めようと思ったのは、製紙会社に勤務していたんですけれども、そのときまでこんな美しい紙を地元で製造されているということを知りませんでした。知らなかったことにショックを受けて、地元の人に聞いても、あんまり知られてなくて、それで何とか知ってもらうにはどうしたらいいかなと思って考えたのが、ラッピングをするということでした。

それで、紙を広く知ってもらう、買ってもらうことで、高知県にも目を向けてもらいたいということで、土佐和紙を使った商品づくりをしたり、土佐和紙を使ったラッピングのワークショップなどを行っています。今でしたら、坂本龍馬関係の仕事なんかも来ますので、坂本龍馬の形をした箸袋とか、中岡慎太郎とか、お龍とかという感じで考えています。また、実際販売しているもので、全部土佐和紙を使った金封を作ったりしております。

昨年からは土佐市で「まち歩き」というのを企画しております。私は土佐市で生まれ育っておりますが、どんどん土佐市が元気がなくなっているように感じております。人口も少なくなっていて、商店街も寂しくなる一方で、若い人たちにとっても将来に希望を持つことが難しい地域になっていると感じております。

わたしも含めて県外に出た子どもを持つ親などは、県外でそのまま職を探したらいいというのが普通の会話になっていますが、やっぱり本心では高知に帰って来てもらいたいと思ってるはずなんです。帰ってきてほしいという希望だけを持つのではなく、親である私たちなど実際住んでいる者がワクワクして若い人が帰ってきたくなるような場所にするべきじゃないかと思って、土佐市を元気にするために自分ができることを考えたのが、まち歩きということでした。

現在、プログラム開発中で、まち歩きはまだ始まっていないんですけれども、実際に始動しているのはホームページの「とさあるく。」というものです。ここではウェブ上の道の駅みたいな感じで、土佐市の食とか人とかイベントなど、いろんな情報を細かく集めて発信することを考えています。

今後の取り組みとして、まずこのまち歩きというものの自体は、土佐市に興味を持ってもらうためのツールであって、土佐市プロローグと考えております。現在の取り組み、活動の中で実際のリアルな拠点が無いということが困っている点です。将来的に拠点となる道

の駅ができることを今目標にしております。

知事： これ面白いですね。「とさあるく。」土佐市の商店街なんですか。
高知県で例えば観光にしても、まちを楽しんでいただくとかいったときに、やっぱり歩くというのはポイントかもしれませんね。大規模な観光拠点施設、例えば東京ディズニーランドみたいなものがあるわけではない。けれど、普段の何気ないところに面白みがあるみたいなところはすごくあるんじゃないですかね。坂本龍馬ゆかりの地として、例えば潮江橋のたもとにあるクスノキがあるでしょう。当時侍の子たちはあの周辺で水泳の練習をしていたはずなので、あのクスノキというのは、樹齢からしても坂本龍馬も見てるんですね。普通のクスノキですけど、ただ歩いて、まち歩きして見ていてガイドさんに、「あれは坂本龍馬も見たクスノキです」と言われたら、おーって思うじゃないですかね。「ここのたもとで乙女姉やんに鍛えられたんですよ」とかいう話になりますと、土地土地の由来とか面白みというのが出てくる。そこに価値を見出していくみたいなやり方はあると思うんですよ。

全国的に有名になった典型的なものというのが、「長崎サルク」だと思うんですよ。今高知市では、「土佐っ歩（とさっぽ）」という名前で行くつかコースを設けてまち歩き観光をやらうとしてるんですけど、土佐市も「とさあるく。」というのを知らせていただきました、楽しみです。是非、頑張ってくださいと思います。

「土佐っ歩」というのも、始めて1年半ぐらいになるはずですけど、やっぱりコースによって成功するのと、そうではないのがあって、発着点がすごく重要だと言われたことがあります。「龍馬の生まれたまち記念館」という所をスタート地点にして、それを最後に戻ってくるっていうのはうまくいってるんだそうです。それが一番人気だと言っていましたけど、やっぱり拠点がはっきりしてるというのもあるみたいです。

是非進んでいけますように。いろんなアドバイザーさんなども全国的にいるらしいので、是非いろいろ(県の支援事業を)使っていただいて、進めていきましょうね。多くの地域で進んでいければと思います。

【高知の紙のアピールへの行政からの後押し】

D： 日高村の製紙会社のDと申します。私どもは日高村の山奥に小さな会社がありまして、昔ながらのコウゾの和紙を手漉きの時代から作っております。もともと製品が障子紙であったり、掛け軸の裏打ちの紙であったり、あと昔の提灯、最近ではランプシェードとか言ったりするんですけど、その原紙であったり、ラッピングの製品であったりとかいうものを作っております。

私は9年前に高知に戻ってきたんですが、その頃私どもの会社はほぼ100%OEM(他社ブランドの製品の製造)でして、名前はほとんど外へ出ていませんでした。完成品が県外でできるものですから、その完成させていただく企業さんの名前ですることができるというところで、商売をしておりました。

ところが、掛け軸とか障子紙とかご存知のとおり、生活様式の変化で年々減っていています。そこに危機感を覚えまして、私どもでは日高の製紙、高知の紙っていうものをもうちよっと県外とか国外とかにアピールしたいなというところから、新しい取り組みを始めたのが、文化財の修復という修復用の紙でした。

一番の目的は、高知県にある製紙会社が、この様な技術があるということアピールしたいということで、そこに目をつけて文化財の修復を始めて今に至っているわけですが、帰ってきて10年間いろんな仕事をして、他の製紙業者さんともいろいろなお話をさせていただく中で感じたことは、越前和紙であったり、美濃和紙であったりというのは全国区のブランドになっているんですけど、土佐和紙というのがちょっと押しが弱いというか、まだ全国に聞こえてないような部分があるんじゃないかなというのがありました。もうちょっと高知の紙、土佐和紙というちょっと古い感じではなくて、高知の紙っていうものをもうちよっと全国的にアピールできたらなということで製紙業者同士で今動いております。

高知の紙は皆さんご存知だとは思いますが、手漉きの紙では人間国宝の方もいらっしゃるし、最先端のもので言いますと、土佐市の会社でハイブリッドカーのバッテリーのセパレーターの紙であったり、そのまた次の新しい世代の電気自動車のバッテリーのパーツであったりというものを作ったりしている会社もあります。手前味噌になるんですけど、私どもの文化財の修復のような薄い紙というの、世界中で高知の何社でしかできません。県外、海外へのアピールというものは各企業の努力で行うものだと思うんですけど、県内の製紙業者が集まって話していく、アピールしていくものをほんの少しだけ行政からも後押ししていただくと、それに携わっている社員とか、そういう紙の仕事をしている方々がもうちょっと仕事に誇りを持ったりできるんじゃないかと考えております。

知事： お話を伺って、正直驚いたんですよね。すごいですね。どこで文化財の修復をやっておられるかといったら、国立国会図書館、国立公文書館、国立博物館、海外では大英博物館、ルーブル美術館とか、そういうところで修復のために使われているということで。人が立っていると、向こうがそのまま透けて見えるような薄い紙なんだそうですね。

越前和紙や美濃和紙はアピールは高いが、土佐和紙は押しが弱くて、高知で和紙を漉いているのかと言われたって話でしょう。和紙と言えば高知なんだと、土佐和紙なんだという感じなんですけど、私どもとしてもそこにものすごく反省点がありますね。

D： 行政にお願いするというのもちょっと変な話ですけど、もちろん企業の責任であるので、これから世代がちょっとずつ変わっていく中で、もう一度今までできなかった企業同士の話し合いを進めていって、高知の和紙、紙っていうものをアピールしていきたい。そのときにはまた高知県産としてほんの少しだけ行政からもアピール、後押ししていただけたらと感じております。

知事： 私もちよっとお伺いしたことがとあるんですが、土佐の製紙の皆さんというのは、それぞれが独自の高いところを追求しておられて、ある意味すごくハイテクなので、それぞれの道というのを持っておられると伺ったことがあるんですね。

だけど、全体としてのベースにある土佐和紙というものの水準の高さと言うことの認知度を、ある意味まとめて訴えていくことは非常に重要だと思います。まとまって売っていくということも和紙としてPRしていくということも、是非皆さん若手でまとまってやっっていこうじゃないかという話になったとき、我々も応援させていただきたいと思えますし、それからデザイナーグループの皆さんと一緒に土佐和紙を使ったいろんな企画を作って売っていくとされている取り組みなど、そういうものをいろんな形で外向きに売っていく展示会、商談会でPRしていく、マッチングしていくということや、例えば専門家の方と結び付ける仕事などで支援させていただきたいと考えています。ただ、私つくづく今回感じたのは、自分自身がよく存じ上げてない不明を恥じるんですけど、やっぱりそういう技術が1個1個あるということをしっかり把握していくことが、大事なんだろうと本当に思わせていただいたところです。

今度、「ものづくり地産地消」という政策を強化しようとしていて、「ものづくり地産地消センター」というのを6月3日に産業振興センター内にオープンする予定なんです。そこで県外の方も含め県内企業さん同士の、いろいろなマッチングの支援をしたいと思えます。だけど、それがための第一歩としてやっぱり県内事業者さんでどういうことができる、どういう技術を持っておられるっていうことをしっかり把握していくことを、今改めてやらなければいけないということを言っているところです。

本当は4月1日からオープンしたかったのが、6月3日からにしたというのは、改めて自分たちの県内技術の把握度を高めて、自分たちのデータベースを強化するということが是非すべきだということで、準備をしているところなんです。

【こうち型集落営農の取り組み、少子高齢化による労働不足、次のリーダーの育成】

E： 私の住んでいる上東地区は仁淀川の支流「上八川川」の現流域に沿って東西に約5km、4つの集落からなっており、標高250mから450mにある中山間地域です。

まず私たちは日頃の取り組みの中で3つの柱を挙げています。1つ、上東を交流とふれあいの里にする。2つ、上東から文化を発信する。3つ、上東を農業で売り出す。

これまでの取り組みですが、地域活性化に向けての活動のきっかけは、平成9年3月に上東中学校が閉校となり、そのときから「吾北カタシの花祭り」をスタート、14回実施しています。高知県では樺の木のことをカタシといいます、これは日本一の大きさの樺の木です。県の天然記念物にも指定されています。幹周りは恐らく大人2人でも抱えられないぐらいの大きさです。これは上東地域のシンボルでもあります。

平成17年7月からグリーンツーリズム研究会のほうで農泊を開業しております。また

パンの学校を毎月実施しております。パンの学校というと、食べるパンのほうをイメージするかもしれませんが、これはドラム缶でできた楽器、スチールパンのことです。このパンの学校では、演奏や製作を行っております。生徒さんは、地区内、また県内、県外では香川、愛媛、兵庫、大阪とかから参加しております。平均して1回15、6人ぐらい、多いときには40人ぐらいおります。

平成17年から酒米「銀の夢」を栽培しはじめ、土佐宇宙酒としても売り出されました。スタート時は50アールでしたが、平成22年度は125アールと面積が増えています。平成23年度は145アールを予定しており、スタートからの3倍ぐらいの面積拡大となっております。平成20年はこうち型集落営農モデル事業に取り組み、平成21年2月に上東地区営農組合を設立しました。農作業の委託事業もあり、倉庫、農業用機械、ビニールハウス等が導入されましたので、これを機会に耕作放棄地なども解消していきたいと思っております。

それから都市住民との交流では、現在高知大学と平成18年から食をテーマに交流をしております。

課題となっているものは、少子高齢化による人口の減少、これはもう若い世代も少なくなってきた、上東地区で高齢化率が50パーセントを超しております。

それと有害鳥獣による被害で、今まで大半はイノシシのほうでしたが、一部ではシカ、またサルの方も出てき始めて、ちょっとお手上げの状態の地域もあるようです。

それと基盤整備率が低いために、農作業の効率が悪く上東地区で基盤整備率が11.7%です。そこに大型機械が入っても、水田が狭いいため、どうしても作業効率が悪くなっております。

今後の取り組みですが、第2、第3のリーダーを育てるということを目指しております。これは平成9年当時のメンバーが現在までいたっているということですので、やはり次のリーダーを育成しなくてはならないと思っております。

それから他の地区との連携。これは特にイベント等でお互い助け合っていこうということを目指しております。自然体験や田舎生活体験ができるような里、これは都市住民との交流の場の中でこういうものを築き上げていきたいと思っております。

それから、少子高齢化による労働力不足に対して援農制度とか、棚田のオーナー制度とかを取り入れていきたいと思っております。

知事： そうなんですか。カタシというのは日本一の椿なんですね。

E： 今まで日本一の大きさは、富山県にある氷見の椿が日本一と言われていましたが、幹周りではこちらが日本一の椿の木です。

知事： すごいですね。

こうち型集落営農の取り組みでは大変ご指導、ご協力いただいております。本当にありがとうございます。中山間地域の課題という、人口の減少と少子高齢化の話、そして有害鳥獣の話だと思いますが、それに果敢に挑戦しておられると伺っているところです。

少子高齢化が進んで、高齢化率が50%ぐらいになってくるような集落であればこそ、まず第一に生業をしっかり持つていくことが非常に重要で、そういう点で、こうち型集落営農はいろんな形で現金収入が得られることができる、中山間地域でも高齢化が進んでも得ることができるような、そういう集落作りを目指す取り組みです。いろんな作物を導入したり、さらには一次産業に関連した例えば観光であったりとか、加工であったり、民泊であったりと、そういうことを進めていかれることがまず重要なんだろうというのが1つです。もう一つは、人口が減少して高齢化が進んでいるからこそ、交流人口の拡大を制度的に仕組んでいく、例えば棚田のオーナー制度なども典型だと思うんですが、そういうことが非常に重要なんだろうと思います。さきほど産業振興計画についてご説明したとき、ものづくりの地産地消、ものづくりを強化するためにも地域地域で生業が成り立って行くような集落づくりをしていく、上東地区のような取り組みというのをもっともって県内各地域に拡大していきたいと思っています。

特にお伺いしたいなと思っていたのは、リーダーの方がだんだん高齢化していったときに、跡を継ぐ人が果たして育てられるかどうか。そう簡単な取り組みでないだけに、やっぱり第二、第三のリーダーというのをしっかり育てるような仕組みを持ってないと、長続きしないと言われることがよくありますが、ここらあたり何かアドバイスなどをいただければありがたいなと思っております。

E: 今までは地域を元気にしようという思いだけで突っ走ってきたという感があります。それで、我々の子どもとかが会になかなか参加しにくいような状況にあります。やはり若い者同士が集まりやすいような場づくりとか、そういうものもこれから必要じゃないかなと思います。

それからやはり女性も参加してもらって、やはり男性とまた違った視点から上東地区の将来を見てもらいたいなというような考えもあります。

知事: なるほど、それから、他の地区と連携して参加人員を増やしていく中で、リーダー候補を広く募っていくという方向性などもあるんでしょうか？

E: 2年ぐらい前から起こしている活性化事業の津賀谷（つがのたに）地区の棚田の火祭りとかいうイベントのときには、多くの人手を要するため、地元だけではなかなか人が足りないので、我々上東地区のメンバーも手助けしています。将来的には上八川川流域、旧上八川村ということで1つにしてはどうかというような声も挙がっているようですので、何年先になるかわわかりませんが、そういう構想でいきたいなと思っております。

知事： こうち型集落営農は今16モデルありますが、これを何とか32集落ぐらいに広げているなどところで実現していくことを一つの目標にしていますので、またいろいろご指導ください。

【武田勝頼の伝説を生かした地域おこし】

F： 仁淀川町役場所在地である大崎で40年ほど前に見つけた1個の宝石の原石は、磨きようで新たな観光資源になるのではないかと直感しました。

江戸時代後期、戦国時代の武将・武田信玄の子孫は武田信武で終わっている武田家系図からこの物語、仁淀川町に武田家子孫・武田勝頼伝説が全て始まりました。自分なりに研究はしていたのですが、なかなか進まず、他人に賛同してもらうまでには至りませんでした。

10年ほど前、吾川村（現仁淀川町）の文化財を見直す勉強会を立ち上げ、子ども達とお宝発見探偵団を月1回行っておりました。その中で、物語が徐々に明らかになってきました。西暦2009年には勝頼が亡くなって400年になることから、何かインパクトのあるイベントをできないかと前の年の9月に地域支援企画員に協力を依頼し、仲間に相談して、難産の末、「武田勝頼土佐の会」を立ち上げることができました。

現在は越知町にある「越知平家会」とスクラムを組んで活動を始めました。2年間かけて行ったイベントで反響は広がり、フォーラムは全国規模になり、予想を超える成果だと思っております。昨年は長野県で講演の依頼を受けて行ってまいりました。NHK大河ドラマ「風林火山」での放送から他県でもユウ姫と勝頼諏訪の会や、続いて葦崎にも会が発足するなど、民間での交流が始まっております。先月（3月）の16日に山梨県の老人クラブで、総務省主催の地域おこしセミナーにおいて高知県の地域支援企画員が仁淀川町に伝わる物語や伝説をもとに、官民協働で町おこしの先頭に立って活動していることを取り上げ、地元の山梨県でも県内市町村への駐在員派遣制度などを導入してほしい、と紹介されたとのことでした。

最後に提言をさせていただきます。私たちは高知松山間を「ミステリー街道33」ということで売り出しています。観光バスは高速ばかり通っていますが、特に松山市の50万都市は大きなターゲットになろうかと思えます。松山市といえば「坂の上の雲」や来年には大河ドラマ「平清盛」が始まります。当町と隣の越知町の「平家会」とも連携してやっていますので、龍馬と安徳帝、それから武田勝頼を道後と結ぶような国道33号で盛り上げていったらいいかなと思っています。

知事： 「ミステリー街道33」というのは面白いですね。私も仁淀川地域産業振興監から教えてもらったんですけど、民間旅行会社主催の仁淀川流域リバーツーリズムという流域の観光商品ができたそうですね。仁淀川流域を是非いろんな形で観光資源化していきたいと思っていて、ご存知のとおり、仁淀川は日本で3番目にきれいな川と言われていま

すでしょう。西日本では一番なんだそうですね。ものすごくきれいな川で、しかも景色もものすごく美しく、「君が踊る夏」という映画の舞台にもなりました。もう1つ、加えて高知市に比較的近いので行きやすく、いろいろ高知市とタイアップした観光商品化がしやすいというのもすごい強みだと思います。流域の市町村の皆様方がタイアップして今観光で売り出しているところとされていると伺っていて、その1つの結晶がリバーツーリズムという商品だと思いますし、まさに勝頼の会の皆さんが売り出そうとしている「ミステリー街道33」ともつながっていったんだと思います。本当素晴らしいと思います。

おっしゃる通り、仁淀川など高知の自然というのを売っていきいたいというのが1つと、もう1つは歴史が高知県の売りになっているというのも重要だと思うんで、今「志国高知龍馬ふるさと博」の目指していることは、「龍馬伝」のときの「龍馬であい博」に比べて、もう一段幅を持たせていきたいと思いますということで、いろんな維新の志士をご紹介をしようという方向感が1つと、歴史を縦に見ていって、例えば長宗我部元親を売っていくことをやってみようとか、自由民権運動にも視野を広げていこうとかという方向にしています。こういう「ミステリー街道」という形で売っていける取り組みがあればいいなら、是非PRできればいいなと、思います。

ガイドさんとかはもう現地でおられるんですか。

F: はい、私がやっています。それから、先ほどお話した他県との民間での交流では勝頼の会で公募したキャラクターを使って葦崎でネクタイができていたりします。葦崎との交流は今年は議会が視察に来たりとか、夏にこちらへの2泊3日のツアーが組まれています。

知事: 龍馬会もご存知のように各地でもものすごく深い交流がありますよね。武田のゆかりの土地同士で今後も交流ができるといいですね。

F: 来年、全国の武田の里サミットを計画しています。勝頼の子どもの信勝の元服式をやりたいと思っています。ぜひ、知事にも参加していただきたいです。

【障害者の工賃アップの取り組み】

G: 私は現在、障害者通所施設作業所の所長とサービス管理責任者を務めています。知的・精神・身体障害のある方たち22名が日中活動の場として作業をされています。22年の月額平均工賃は、当作業所の場合1万5002円でした。月額です。

障害があっても月に5万円の給料を稼ぐことができるようになるために、事業の柱となる自主製品の開発に取り組んでいます。例えば土佐湾で養殖されたキリンサイのパウダーを使用したタコ焼き作りや、タコの代わりに土佐名物カツオを入れたタコ焼き風の食べ物などを考案しました。県食品産業研究会に加入し、成長分野育成支援研究会より、現在ア

ドバイザー派遣事業を受けさせていただいております。

次に課題といたしまして、下請けの仕事が少なくなって困っています。作業所に働いてきているのに、作業がないのはとても辛いことです。障害者自立支援施設等からの物品購入や観光地の役務の提供と随意契約が認められていますが、当地域では行政からの仕事の受注がほとんどなく、今後、町役場や県の出先機関の方々にもさらなるご周知とご理解、ご協力をいただきたいと願っておりますので、よろしく願いいたします。

もう一つの課題といたしまして、当地域には障害者が住むグループホームやケアホームが1ヶ所もありません。障害者福祉サービスに携わる当法人が役割として開設しようと努力を重ねていますが、県のグループホーム補助事業としては土地がないと申請ができなかったり、障害者自立基盤整備事業では、賃貸物件の増改築をするための事業がありますが、現実的にはそのような許可をしてくれるような一軒家はほとんど見つかりません。親も高齢化し、家族から自立して生活できるようなホームの必要性が高まっています。

県の地域福祉部長は、この現状をいの町の福祉課課長より聞いてくださり、共有地が見つかりました。できれば今後、いの町長とも話し合いを重ね、ホームを建築するための準備を進めていきたいと考えていますので、よろしく願いします。今後、グループホームやケアホームのニーズはますます高まると予測されますが、第2、第3のグループホームを作るための土地の調達のための助成制度もあれば、NPOの私たちのような小さな法人にとってはよりハード面での整備も容易になると考えられますので、ご検討をお願いいたします。

今後の展開としましては、いの町の中心に位置している商店街にある町有地なども有効活用させていただき、障害者の住まいの場を確保していくこと、商工会や観光協会とも連携の絆を強め、商店街の閉ざされているシャッターをまず1つ開けることから始めて、障害のある人たちが地域に支えられながらも、地域を支える一人になれるよう努力していきたいと思います。

またキリンサイ組合にも加入し、キリンサイを使った新しい自主製品の開発にも取り組んでいますが、将来的にはブランド化をはかり、県外へも販路を広げていきたいと希望を抱いていますので、応援をよろしく願いします。

知事： 私、一度中央公園で車で売っておられてたタコ焼き買ったんですよ。みんなで食べて、おいしかったです。本当にいろんな商品を開発しておられますね。

工賃のお話がまず第一にあり、それから下請のお話もありました。これは、いずれも関連している話だと思いますが、やっぱりこの今の厳しい経済情勢の中で、できるだけ公的機関からの発注を増加していく必要があるんだろうと思います。我々の取り組んでいる工賃倍増5ヵ年計画という障害者施設の皆様方の工賃を倍増しようという計画をご存知だと思います。

全国で平均工賃の月額というのは平均が1万2695円だそうです。これで高知県が1

万5133円で全国6位。でも前は1位だったんですね。ところがだんだん2番になって、6番になってという形になってしまっています。けれど、そもそも1万5000円周辺のこの平均賃金でいいのか。もっともっと高くすべきであるという方向が一つですが、まずはせめて倍増を目指してということで取り組みを進めていきたいと思っています。そのためにも一つは、公的機関からの発注をもう1段増加する。そういうためにも、どういう施設の皆様方で、どういうことをやっているかということ、把握して、県内の市町村にもどんどん発信していくような、地元の公共団体だけじゃなくて、他の自治体の方にもということがあると思いますので、そういうことをまず強化をする取り組みをやりたいということが第一にあります。

それともう一つは、やっぱりだんだん工賃が高くなっていくようにするためにも、一定ビジネスとして成功していく方向でというのも、是非重要だろうということで、経営コンサルタントを派遣させていただき事業などをもっと積極的に展開していきたいと思っています。加えて今年度から、先ほどブランド化とおっしゃった施設の自主製品の開発やパッケージデザインなどの指導・助言を行うアドバイザーを派遣する、かつ売り込みなど単品、単品についてのアドバイスをさせていただくような事業を設けようとしているところです。あわせてそれがさらに進んで、例えば地産外商公社で売り込みのお手伝いをさせていただいたりすることにもつなげていければなと考えています。

例えば、日高村のNPO法人の皆さんともトマトのソースの売り込みを公社と一緒に仕事をさせていただいて、「まるごと高知」で売るとか、パッケージなんかも大幅に改善したりとか、そういう形で障害者施設の皆さんをバックアップする施策から始まっていて、さらにはビジネスとしてぐんと伸びていくような、日本一の健康長寿県構想の取り組みから産業振興計画へのバトンタッチしていくみたいな感じで少しでも工賃を上げていけるように、取り組みを進めさせていただきたいと思っています。

ただきめの細かさなどという点で足りないことがいろいろでてるんじゃないかと思うので、皆様方にいろいろご教授いただくようお願いしたいと思うんです。

あともう一つ、いの町でグループホームがないという話について、我々も、(施設が)ない地域に作っていくということは非常に重要な点だと思っていますので、いの町とも連携を図ってその地域での住まいの場の確保に向けて、是非取り組ませていただきたいと思います。

先ほどのアドバイスとか経営アドバイザーとかブランド化の取り組みなどいろいろやっているんですが、もう一段こういうのがあるといいのに、というのがあれば是非教えてもらえませんか。

G: お陰様でこちらのほうは、アドバイザー派遣事業で、1年半にわたってコンサルタントの方に来ていただきました。5カ年計画を立てまして、レインボー作戦という7つの作戦を作りました。その中でタコ焼きの売り上げを上げていこうということでのぼりや、

音楽を流そうとか、もっと目立つ何かをしようというところで終わってしまいましたが、次に育成分野の派遣事業というのを受けて新しいコンサルタントの方につないでいただきました。

とっても面白いアイデアを出してもらって、県のほうにも今申請を上げさせていただいたり、県外にも出していこうという話も出て、何かすごく見通しが明るくなるようなそういうアドバイスをいただいたりして、今はもう元気にやろうという気持ちになっております。

【訪問介護の上乗せ補助、専門職、ボランティアの確保】

H： 当社協の日頃の取り組みですが、児童福祉から高齢者福祉まで幅広く事業を展開しております。児童福祉においては、現在保育所3園、放課後子ども教室を2ヶ所、それから子育て支援センターの運営をしております。それとチャイルドシートの貸し出し事業と、児童福祉関係ではそのような業務をしております。

高齢者福祉の関係では、介護保険事業所として訪問介護、居宅介護支援ケアマネージャー、それから通所介護、デイサービスセンターを3ヶ所、それと訪問入浴事業をやっており、特に福祉の関係では給食配食事業として、毎週月・水・金の夕食をボランティアに協力いただきながら配っており、配食数は、大体年間1万1000食を超えております。仁淀川町はかなり広い所ですが、配食事業によって、1万1000回は安否確認ができたということです。

それから地域の交流、集いということで、生きがいデイサービスを200回、自主的なサロンとしてふれあいサロンを58回開催しております。

活動の中での課題ですが、介護保険事業自体では、特に訪問介護が毎年赤字が続いています。1日8時間労働として、移動時間というのは介護報酬が発生しない部分ですが、その移動時間が大体2時間から3時間費やしておりますので、当然、訪問件数にも限界が来ております。

それと、うちも保育・介護の専門職の確保が難しくなっており、なかなか運営面で全員を正職員に採用できるはずもなく、臨時、パート職員で対応をしておりますが、この前保育士の募集を新聞に出したり、職安にも出しましたが1件も問い合わせがなくて、地域的にも遠いので、なかなか有資格者がこちらのほうまで来てくれない状況です。

それと、社協の事業へのボランティアの確保が非常に重要ですが、不足しており、今は何とかできても、これから困っていくんじゃないかなと思っています。集落には人がいなくなってきたり、仁淀川町も3年前からいいますと500人ほど人口が減っております。高齢化率も高くなってくる現状ですので、ともに支えるということが本当に難しくなっているのではないかなとすごく感じております。

この中でも今後の取り組みとして、こんな形で地域づくりができればいいなということで、最後にお話しさせていただきます。以前、私の子どもの保育園で、クリスマス会に保護

者の代わりに老人クラブの会長さんがサンタクロース役を気軽に受けてくれましたが、そうすると子どものほうから、今年は本物が来てるよという声が出て、なかなかこの企画はよかった、当たったなと思いました。

それから17、8年経った今も続いていますし、また保育園のほうからも他のいろいろな行事に老人クラブへ声もかけていただいて、今は行事のスタッフとして非常に保育園も助かっているし、老人クラブの会員さんもやり甲斐があると聞いております。こういった活動をきっかけに社協がアクションを起こしてやっていけたらいい方向に進んで、町が元気になっていけたらいいなと思っております。

知事： お話のように訪問介護事業が毎年赤字というのが、本当に大きな課題ということで、今回、調査協力していただいて、訪問介護についての県単独での上乗せ補助の制度を設けたところですけれども、本当にデータ集めなどでお世話になりまして、仁淀川町の皆さんありがとうございました。

これは、特別地域加算されているものに、さらに上乗せで距離別に応じて、特別の加算をするという制度で、ある意味高知県独自の、日本初の制度ではあるんです。正直この制度を本当は1年前にやりたかったんですが、どうしても定量的な分析というのがしきれないということで、去年1年かけていろいろ調査にご協力いただいて、分析をして、今年度から加算をしているところです。23年度に実施をしていく中で、もう一段検証しないといけないと思っているんです。実践していきながらよりバージョンアップしていきたいと思っています。また、是非いろいろご指導いただけますよう、よろしくお願ひしたいと思ひます。

専門職の確保、ボランティアの確保の課題という話については、今回、県の社会福祉協議会を強化しました。福祉人材センターと県の研修センターというものを作っています。この福祉人材センターの大きな仕事というのが、いろんな専門職の方々の育成とマッチング支援だと思ひていまして、例えば福祉の分野のやる気を持っておられる方を、県域全体でマッチングする場をできるだけ設けていくことで、少しでも人の確保ができるようにという取り組みをしていきたいと思ひています。これが本当にうまくまわるといいと思ひています。

ボランティアの確保の課題という話になってくると、釈迦に説法になってしまつて恐縮ですけれども、地域で話し合つていただいて、多くの人がやる気になっていく体制づくりだと思います。今年度から地域福祉活動計画というのを地域地域で作つていき、この過程で、地域の課題に応じた福祉のありようというのを地域の皆さん同士で話し合つてもらつて計画づくりをしていっていただきたい。いわば、産業振興計画における地域アクションプランの福祉版みたいなものだと思うんです。

進めていっていただく過程の中で、いろいろなボランティアをやってかまわないと言つていただく方を巻き込んでいくこととか、さらには人材センターを活用していただくこ

ととか、さらに社会福祉協議会に作る研修センターと一緒に研修を受けていただく中で仲間作りしていただくなど、そんな簡単な課題ではないと思うんですが、県の社会福祉協議会を一連の問題を解決していくための1つのエンジンにすべく組織強化をしていきたいと思っています。ただ、本当に地に足のついた対策になっているかどうかという辺りは、ちょっとこの1年でもう1回この新しい仕組みがうまく回るか検証したいと思っています。またいろいろ教えていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

保育所のクリスマス会の企画、当たりでよかったですね。ポイントとなるところは、本当に世代間の交流ができる場所じゃないかと思います。あつたかふれあいセンターも、本当に高齢者の皆さんも子ども達も1ヶ所で集えるっていうところに一つねらいを置いていて、そこは多くの方にそれなりにウェルカムしていただいている理由じゃないかとも思うんです。ただもう1つ、今年度、実はあつたかふれあいセンターをもう一段機能強化というか、前方展開できればと考えています。「集う」という機能に加えて「訪問」したり、それから、例えばお話にあつた給食の配食などを通じての「見守り」、「安否確認」ということなんかも含めて、より前方に展開できるような形にできないかなということを考えているところなんです。そういうことで、地域の皆さんの支え合いの力を強化することを進めていきたいと思っています。

今回、東北の震災でいろいろ援助を受けて復旧、復興のステージに立ち向かっていかれているスピードの速い所というのは、やっぱり地区の支え合いの力が強い所ですね。例えば、地区会の制度が強力で、地区長さんがしっかりと地域の復旧、復興にあたっている支えておられるということがあるんだということを伺ったところなんです。私、明日(4/23)からちょうど気仙沼へ行ってきますので、そんなところでもまた話を聞かせてもらいたいと思っています。日本一の健康長寿県構想でもって地域の支え合いの力をしっかり作り上げていくことが、いざというときの防災体制、それから復旧・復興の体制に即つながっていくようにということを、高知県では、是非考えて進めていかないといけないと思っているところなんです。

～会場を含めた意見交換を行いました～

【加工品グランプリなどのイベント】

A： 県内の加工品グランプリみたいなイベントができないでしょうか。一挙に集めて、味見して採点してということをテレビなどでやっていただくとか。

知事： それでちょっといい成績だったら、どこそこへチャレンジとかそういうようなものですか。面白いですね。それ考えてみましょう。わかりました。いいと思います。グランプリみたいにしてやってみる。それ自体イベントにして、お客さん呼んできてもいいですね。

【県内の産品が紹介できる場所】

会場傍聴者： 「ふるさとまつり」みたいなものが毎年鏡川河畔で行われているんですが、あれを私とても楽しみにしています。思いがけず、地元からもおいしいものが出ていて、それを全く地元の者が知らなかったというようなこともあったりして、楽しいですけど、是非あんな形で週替わり、日替わりぐらいでいろんなところからお店が出せて、それで県外から来られた方々にも楽しんでもらえるというような場所があったら、地元の者にとっても見直す機会になりますし、県外の方へもアピールできるんじゃないかと思うので、是非そんな場を作っていただけたらと思います。

知事： 分かりました。ふるさとまつりは、10月末に鏡川でやっている催しですよ。あれに産業振興計画のブースをつくっていたのをご存知ですか。3日間で10万人ぐらい来られるので、ものすごい効果もあるし、何かを売り始めるときのいいチャレンジの場にもなるんだそうなんですが、RKCさんと県でタイアップしてやらせていただいていた。いい機会だと思っていますので、いつもいつもああいう大規模なイベントというようなことはできないかもしれませんが、別に非常にいい場所があると思います。大丸の前の「てんこす」という所がありますでしょう。あれも高知市のアクションプランなんです。「てんこす」の店の前にイベントを打つ場所があって、あそこで地域地域のいろんなイベントをやるのを募集してるんですよ。もし、ああいう場を活用していただければ、あそこだったらたくさん人が前を通ってますので、いつも鏡川、毎週っていうわけにはいかないと思いますが、例えばあそこだったらスポット的にできると思います。(仁淀川地域本部の振興監の方から、あとでご紹介しますので。)

4. 知事からの閉会のあいさつ

今後の1年を通してやっていく中で、今日いただいた話を伺っていて、もう一度今やっている状況はどうかということを確認させていただきたいということもあるんじゃないかなと思っています。是非、皆様方のご意見を生かしての県政、地に足の着いた県政ということにしていきたいと思っています。是非とも皆様方からの今後のご指導、ご鞭撻よろしく申し上げます。

本日は、大変遅い時間までありがとうございました。皆さん、心より感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。